

浦河小学校略史



—北海道で四番目の小学校

校舎を背景に八の字ひげの校長と視学（地方教育行政官）、詰襟服の男先生、紫袴の女先生が並び、それとは対照的に、サイズをあわない学生服にでんぷん靴、中にはかすりの着物を着た児童の姿もある。これは、どのような時の写真なのか不明だが、大正初期の浦河小学校の記念写真である。

明治五年に学制が發布され、浦河小学校はその五年後に公立小学校として道内で四番目に認定されたというから、既に百十余年の時を刻んでいる。

浦河に熊本、長崎からの開拓者が入植したのは明治四年である。内地ではすでに学校教育が行われていたこともあり、無学の恥をさせないと考えた移住者は、入植者の中の知識人、田崎萬蔵を師として、彼の居宅に子どもたちを呼んで簡単な教育を始めた。おそらく寺子屋式で、読み、書き、そろばんといった程度で、それもごく少数の子弟が通ったにすぎなかったろう。しかも、農閑期だけ開設という記録が残っている。

しかし、年を追って和人の定住者が増え、子弟の教育がいつそう重視されるようになってきた。明



明治二十年の浦河小学校、現在の大黒座の跡
—北海道立史館より（北海道大学附属図書館蔵）

治十年、開拓使官舎（大通三丁目浦河警察署付近）の払い下げを受け、ここに本格的な教育機関として浦河小学校の礎が定まった。浦河神社神官小幡省三が校長、山谷覚次郎が世話係、今で言えばさしあたりPTA会長といったところか。児童数三十二名、修業年数四年、校長をふくめ教師三名のスタートであった。

時を経て明治二十二年九月、官有米倉庫（今の黒座付近）を、これまた無償で払い下げを受けて移転したが、この直後に杵臼、西舎、荻伏などに分校が設置されている。また従来の四年制から更に二年間の高等科を併置し、呼び方も「公立浦河小学校」から「公立浦河尋常高等小学校」に改称されている。

現在地に移ったのは明治三十三年で、児童数増加に伴い新しい校地が求められて、初めて学校らしい風采をそなえた校舎が建てられた。現在、当時をしのぶものは何も残っていないが、山側に沿って平屋建ての校舎が立ちならんでいた。生徒数は明治末年にすでに六百名を超えている。高等科へ入学するために下宿する者、幌別、杵臼、西舎など各村から二里以上の道を通ってくる者も沢山いて、教育の重要性がより深く人びとのあいだで認識されていたのを知るのである。

二度目の新築がおこなわれたのは昭和十年のことであり、この年は浦河駅の開通式が挙行された記念すべき年でもあった。しかしその後の太平洋戦争の勃発とともに、浦河尋常高等小学校は「浦河町立国民学校」と改称され戦時教育が行われた。その頃の学校日誌には、慰問袋発送、国防献金、学徒防護隊結成、耐寒行事、戦勝祈願などということばが何度も記されている。そして戦後になって教育基本法が公布され、六・三・三制の実施とともに「町立浦河小学校」と改められたのである。

この章を書くにあたって尋ねた七十歳前後の人びとは、小学校卒業後、函館、札幌、室蘭の中学校へ進学した人たちのいたこと、初めての潮見グラウンドの運動会、冬の薪切りや柴拾いのことなど、

当時の思い出を沢山語ってくれたが、いかんせん百十余年の記録を限られた紙数に書くには無理がある。ぜひとも同校の百年史他を参照されたい。ただ、まるで交通機関のないような時代から、いち早く子弟の教育に着目した先人の業績は、向後の浦河町の発展に大きな力となっていったのである。

このように、開校以来、校地、校名、校舎等いくたびの変遷を経て、一万二千名に達する卒業生を世に送り出し、さる昭和五十二年には創立百年記念式典が挙行されている。

[文責 高木]

【参考】

開校百年 浦河小学校開校記念 百周年記念協賛会 昭和五十二年